

松浦浩子さん追悼

——人と学問——

千波玲子

松浦浩子さんと私が出会ったのは1982年留学先のイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校であった。すでに40年以上が経っているが記憶に残っていることは少なくない。同じ英語教授法を専攻していたが、スタートが1学期異なったために科目を同時に履修することは殆んどなかった。ただ話す機会は多く当時から松浦さんの真面目さと優秀さは印象に残っている。この大学の大学院修士課程の修了には論文を執筆するか総合試験（comprehensive examination）を受験するかという選択肢があったが、優秀な学生であった松浦さんは論文を選択し、指導教官はその後UCLAに移籍した TESTING 研究のライル・バックマン教授であった。卒業後彼女の研究者としての探求心と誠実さは彼の指導のもとで論文を執筆したこの頃に培われたのではないかと推測している。

1980年代イリノイ大学のブラジ・カチュルーという社会言語学者が World Englishes という概念を唱え始め、卒業後日本で異なる大学に勤務していた我々も関連の研究会や学会にともに参加するようになった。World Englishes とは非母語話者数が母語話者数を大きく上回っている英語の言語使用の特殊性に注目し、その社会的言語的状況の研究と分析を試みる領域である。そしてそのころサンフランシスコ州立大学で夏学期に開催された World Englishes セミナーからの帰りの飛行機の中で「日本人学生の非母語英語に対する態度研究をやってみたいね」という話をした。これをきっかけに共同で研究を始め、結果的に30年以上続けることになったが、松浦さんが主に研究テーマを提案し私が協力して行うという形が多かった。

最初の共同研究では日本人学生が非母語話者の英語に対してどのような態度を示すかについて、非母語話者英語の音声日本人学生に聞かせ意味微分法を用いて分析した。その結果を1992年にイギリスのエセックス大学で開催された BAAL (British Association for Applied Linguistics) で発表した。その後30年間に二人で20数回国際学会で報告することになるのだが、はじめての時はかなり緊張した。大学のあったコールチェスターという街は寂しく学会出席者も地味な印象で、緊張も加わり二人とも少々憂鬱な気分になったことを覚えているが、今思えばあれがスタートだった。この研究をさらに発展させて“Japanese Attitudes Toward English Accents” (World Englishes 14: 1, 1995) という論文にまとめることが出来た。

初期の態度研究としては他に“Prospective Teachers Attitudes Towards Native and Nonnative English” (JACET Bulletin 26, 1995) がある。将来英語教師を目指す日本人大学生が持つ非母語話者英

語に対する印象および意識をアメリカ人学生でやはり英語教師を目指す大学院生のそれと比較・分析した。そこでは日本人学生の方がより閉鎖的あるいは保守的であるという結果が示され、その背景についても分析を行った。この論文から 30 年近くを経ているが、いまだに英語が外国語であり日常的には使用される機会が限られている日本社会の言語環境では学生の意識が大きく変化しているとは言えないかもしれない。非母語話者英語に対する日本人の考え方や態度の変化は予想していたよりもはるかに緩慢なようである。

態度研究を発展させる形で非母語話者英語の内容理解度についての研究を行ったこともある。“Comprehensibility Judgment on Japanese Learners’ English : The Case of Hong Kong Chinese Listeners” (福島大学商学論集 76 巻 4 号, 2008) では非母語英語話者であり広東語あるいは北京語を母語とする香港の大学生 220 名に日本人大学生の英語を聞かせ、その内容理解度 (comprehensibility) を検証した。内容理解度に影響を与えるのはどのような言語的要素なのかを 3 つの要因に分けて分析を試みた。その結果、「発音の明瞭さ」および「流暢さ」が内容理解度と有意な相関が見られた一方、「なまり, アクセント」は内容理解度には大きく影響を与えていないことが示された。非母語話者同士による英語コミュニケーションの場において日本人英語話者は流れを意識しながら明瞭に話すことを心がけるべきであり、必要以上になまりやアクセントにとらわれることはないという示唆を導き出したつもりである。

態度研究以外のもので他の研究者と共に論文にまとめたものもある。その中に第一言語と第二言語の口頭表現能力について検証した “Evaluating L1 and L2 Spoken Narratives of Japanese College Students” (Revista de Lenguas para Fines Especificos : 3, 1996) がある。ここでは英語学習者の口頭表現能力はその流暢さ、語彙力、文法などを基準として評価されることが多いが、情報伝達の度合いや正確さが実際のコミュニケーションでは最も重要である。そこで日本語と英語で表現した同じ内容を録音し分析した。情報の表現・伝達能力は言語的知識のみではなく、言語を越えた論理的構成能力も影響することを検証した。

さらに同じ研究者グループで “Intelligibility and Comprehensibility of American and Irish Englishes in Japan” (World Englishes : 18 : 1, 1999) をまとめた。日本人学生にとって異なる国のネイティブ・スピーカーの英語 (ここではアメリカ英語とアイルランド英語) は理解度や印象に差が出るのかを「慣れ・親しみ」の観点から分析した。一般的にアメリカ英語に慣れ親しんでいる学生はアイルランド英語に対し多少否定的な傾向を示したが、理解度はそれほど影響を受けず、またアイルランド英語に親しんでいる学生は印象としてもアメリカ英語と差のない反応を示した。ここでは World Englishes の分類で内心円地域の英語を比較したが、その後この方向性を発展させて、外心円地域のシンガポール英語やフィリピン英語話者についての検証も行うことになった。

言語教育や言語習得に関する「ビリーフ」についての研究も行った。通常 belief という語の訳語は「確信・信念」などとされるが言語習得の領域ではそのまま「ビリーフ」という語が使われることが多い。それは「確信・信念」とは多少異なりより広範な意味合いが含まれるためであると考え

ている。“Beliefs about Learning and Teaching Communicative English in Japan” (JALT Journal, 2001) はコミュニケーションを目的とする英語教育及び学習に対する日本人大学生と教師のビリーフについて調査したものである。300人以上の学生と82人の大学教員が研究の被験者として参加した。学生被験者の多くは教師中心の講義形式のアプローチや正確さなどが特徴とされる伝統的な教授スタイルを好む傾向を示した。一方、教師の側は学習者中心のアプローチ、統合的スキル、流暢さなどを重視する新しい教授スタイルに嗜好が移行している。本研究結果は教授理論と教室での実践との関係をより向上させるためには、英語教育に対する学習者の考えを継続的に調査することの重要性を示唆していた。ほぼ20年後にあたる2019年に同様の内容で調査を行った。その論文が今回の論稿としてまとめたものであるが、20年を経て変化が見られたのは、「コミュニケーションの捉え方」としてリスニングやスピーキング指導を希望する割合が減少したこと、文法が大事と考える割合が増加したこと、語用論的内容を重視する割合が増加したこと、また教師との距離が近くなったこと、グループ活動を好みまた自文化をより尊重する傾向などであった。これらは今日的な英語教育の影響を受けたビリーフの変化だと考えられる。しかし一方でアウトプットのための技能を重視する傾向や読解力を測るためには翻訳は必要であり、外国人教師には日本語や日本文化の知識を期待する、また大学での英語教育必修には賛成するなどビリーフとして学生は依然持っていた。いずれにせよ学習者ビリーフ変容には長い期間が必要であり継続的な検証が必要であると結論づけた。

ここに挙げたものは共同研究の一部であり、30数年の間にはアクセントとスピーチレートが理解度に与える影響などについても研究調査を行い論文にまとめ発表してきた。常に探求心を持ち緻密に研究を進める松浦さんの姿勢に私は教えられるものが大変多かったと今さらながら実感している。

浩子さん（やはりこの呼び方が一番自然なので）、長い間本当にありがとうございました。私がいろいろな研究に携われたのも、国際学会での発表や雑誌への投稿もあなたがいなければ経験することは出来なかったと思います。幾度かの病との闘いそして東日本大震災の経験と困難なこともありましたが、淡々と静かに対処されるその姿勢にいつも敬服しておりました。どうぞ安らかにお休みください。心よりご冥福をお祈り致します。

Insights in Language Testing : An Interview with Lyle Bachman by Jeff Hubbell (jalt.org)

松浦 浩子 (Hiroko Matsuura) — マイポータル — researchmap